

二十七歳読モ店員の災難 —女子トイレに仕組まれた罠



隙間売ト 作

R18

二十七歳読モ店員の災難——女子トイレに仕組まれた罠

隙間売卜
作

プロローグ

トイレ盗撮。

かつて、その盗撮動画を売る者たちは、自分たちの行為を「ノーリスク・ハイリターン」と笑っていた。

捕まっても大したことはない。それよりも、一度うまくいけば、見知らぬ誰かの欲望と引き換えに金を生み続ける。

法律が変わり、警察の取り締まりが厳しくなった今、彼らの言い方も変わった。

「今は、ハイリスク・ハイリターンだ」

それでも、なくならない。

警察庁の統計によれば、近年、盗撮の年間検挙件数は七千件に迫っている。仮にその約二割がトイレ内での犯行だとすれば、およそ千四百件。単純に割れば、一日に三人から四人が、日本のどこかのトイレで盗撮に及び、検挙されている計算になる。

だが、それは「見つかった事件」の数だ。

被害者が気づかなかったもの。誰にも発見されなかったもの。映像だけが切り取られ、名前も知らない誰かの端末へ流れていったもの。それらは、統計の数字には現れない。

都内有数の繁華街に建つ大型商業施設『SCRAMBLE+（スクランブルプラス）』。

ガラス張りの吹き抜け。明るい照明。最新のショップ。休日になれば、買い物を楽しむ若い女性たちでフロアは埋め尽くされる。

その一角にある女子トイレもまた、清潔で、明るく、安全に見えた。

「パタン」

一番奥の個室の扉が閉まった。一人の若い女性が、内側から鍵をかける。

彼女は、その瞬間、自分の姿が誰から見られない場所に入ったと信じている。それは当然だった。本来、そうでなければならぬ場所なのだから。

彼女はまだ知らない。この場所で起きていることが、警察の統計には、まだ一件として数えられていないことを。

第一章 上京

白石彩佳（しらいしあやか）は、スタイリッシュだがクッションの薄い白いスツールの上で、わずかに身を固くしていた。お尻に伝わる頼りない硬さが、今の自分の立場をそのまま表しているようだった。

場所はセレクトショップ『liberte（リベルテ）』のバックヤード。採用が決まれば、来週から彼女の職場になる場所だ。小さな丸テーブルを挟んだ向かい側には、店長の松田が腰掛けている。

「お名前は、白石彩佳（しらいしあやか）さん？ 二十五歳なのね」

履歴書から目を離した松田が、ふっと目を細めた。

「はい」

「なんとなく芸能人みたいな、素敵な名前ね。女子アナとかにいそう、って言われない？」
最初は、住んでいるところやここに来るまでの交通の経路、あるいは今日の天気といった
無難な外堀から埋められるものだと思っていた。いきなりパーソナルな名前という情報に踏
み込まれたことに、彩佳は軽い目眩のようなものを覚える。しかし、その遠慮のない距離感
は決して不快ではなかった。

「あ、言われたことがあります……どんなイメージ？　って思いますが……」

「そう？　で、東北の大学を卒業されて……へえ、うちに来る前は秋田県にある市役所に勤
務？」

テーブルを挟んで、履歴書に目を落とす松田店長の目がわずかに丸くなった。

「はい。実は前職は地方公務員だったんです」

「えっ、そうなの？ それはまた珍しいね。安定してるのに」

「二年だけですが。佐々木希さんの出身地のすぐ近くの役所で、窓口をやっていました」

「へえ、そうなんだ。でもなんでまた、そんな安定した仕事を辞めちゃったの？」

松田は手元のコーヒーカップの縁を人差し指でなぞった。彩佳は言葉を選ぶように、ゆっくりと息を吸い込む。香りまでもが洗練されていた。一流の店ではその店ならではの体験を提供するため、香りのチョイスを専門家に依頼すると聞いたことがある。バックヤードにいても漂う、この店ならではの香りが、胸の奥をくすぐった。

「なんというか……毎日同じことの繰り返しで。窓口に来る人をただ淡々と処理するだけの、機械になっていくような自分が怖かったです。三十過ぎても、四十になっても、そんなふうに同じ席に座って窓口対応したりハンコを捺したりしているのかと思ったら、ある日突然、何もかもが虚しくなっちゃって。本当に好きなことができてるのかなって思っちゃったんです」

松田の唇が、優しく弧を描いた。

「その意味分かるわ。私も転職の経験があるの。でも、二十五歳でその安定を捨てて、不安定な服屋のバイトに飛び込むのは、なかなか勇気がいったでしょう。正社員じゃないのは分かってるよね？ それに、東京のショップ店員なんて、それこそ星の数ほどいるし、女子高生のバイトと競うこともあるくらい、すごく若い業界よ」

「洋服が好きなんです。昔から」

彩佳は逃げずに、松田のまっすぐな両目を見つめ返した。

「子供の頃から、自分でコーディネートを考えるのが何より楽しくて。高校生の頃は、お目当てのショップに行くために、田舎から秋田市まで何時間もかけて出かけていました。いつか自分の店を持ちたい、なんて夢を見たこともあります」

それに――と言葉を続けようとして、彩佳は松田の胸元に視線を落とした。

『店長 松田香奈枝』と刻まれた銀色のネームプレート。三十代後半とおぼしき彼女は、茶髪ショートボブが驚くほどよく似合っていた。身長は百七十センチ近くあるだろうか。スレンダーな肢体を、淡いグレーのパンツスーツが完璧に包み込んでいる。おそらく『リベルテ』で扱っている現行のコレクションだろう。

その佇まい、声のトーン、洗練されたオーラ。サブスクの連続ドラマに出てくるやり手の美人弁護士か、あるいは凄腕の外科医をそのまま現実につれてきたかのような、圧倒的な「シゴデキの東京の女性」がそこにいた。こんな格好いい大人が現実に存在するのだと、彩佳は息をのむ。

これが、東京なんだ。

地方にはいなかった存在。最先端の音楽も、アートも、あらゆる文化資本も、欲しいものは考え、動き、お金さえ払えばすべて手に入る街。毎日のようにどこかでライブやイベントが開催され、自分の「好き」をどこまでも追いかけられる眩しい場所。

この人になら、格好つけずに本音を言っても、きっと正確に受け止めてくれる。彩佳は胸の奥に燦っていた本当の動機を、言葉にすることに決めた。

「自分でお金を稼いで、一度は東京で暮らしてみたかったです」

地方で女性が手に職を持って生きる選択肢は、驚くほど狭い。公務員か、教師か、地元の小さな企業。そこで職場結婚をして、寿退社をし、子どもが小学生になったらパートに出る。子どもが成人する頃には、若かった自分自身の体型も肌も崩れ、新しい何かを始める気力だって消耗しているだろう。

地域の多くの人たちが疑問も抱かない、その「ささやかな幸せ」と呼ぶそのサイクルが、彩佳にとっては、可能性をじわじわと圧殺していく「生ぬるい牢獄」にしか思えなかった。

つい先日までの生活の未来は、あまりにも陳腐で、救いがないように思えて仕方がなかった。

二十五歳。彩佳は様々な面で限界を感じていた。日々の業務の退屈さ以上に、その土地全体の空気を覆うような閉塞感が肌に合わなかった。

彩佳の視点では、「地方」という共同体には、女性を一段下に置く空気が今なお当たり前のようにある。法事で顔を合わせた、ある親戚の男は、血縁の濃さに胡坐をかき、若い女性というだけで初対面の彩佳に対し、

「男はいねなだが？　早く一緒にならねば、子供だって産めねぐなると」と平然と言い放った。

おじさん、それ、令和の今じゃかなりのセクハラだからね。

役所の忘年会や歓送迎会も違和感が満載だった。課長たちの席へお酌に回るのは若手女性職員の「義務」であり、大皿のサラダが届けば、誰に言われるでもなくトングを握らされた。

太腿を触られるような分かりやすいハラスメントこそないものの、無意識に確立された搾取の構図がそこかしこに転がっているようだった。そして宴が跳ねる頃、男たちは連れ立って駅裏の歓楽街へと消えていく。風俗店でストレスを処理するのだ。

本当につまらない。本当に、吐き気がするくらい……。

だからこそ、彩佳はここで引き下がるわけにはいかなかった。

「大好きなファッションに関わる仕事で、きちんとお金を稼いで、都会で……東京で暮らしてみたかったです」

吐き出した言葉を、受け止めてもらえただろうか。

「簡単に言うと、都会への憧れ。それから、洋服が好き。動機としてはシンプルね。来るべくしてここへ来た、っていう感じ」

この人は、物事の本質を掴むのが鋭い。彩佳がかすかに安堵したのも束の間、松田の言葉のナイフが容赦なく飛んできた。

「でもね、現実には甘くないわよ。さっきも言ったけど、高校生のバイトだっていう世界で、あなたは二十五歳。しかも未経験」

「分かってます。でも――」

思わず上半身が前のめりになる。しかし、続く言葉が喉に詰まった。夢と現実の狭間で揺れる不安が、急に胸の奥からせり上がってくる。

「でも？」

「でも……」

彩佳は膝の上で拳を握りしめ、必死に言葉を紡いだ。

「お客様に綺麗になっていたきたいし、お店の素敵な洋服を自分で着て、それを見たお客様に『あのコーディネート、いいな』って思っていたきたいんです。それに『リベルテ』のコンセプトが本当に好きで……大学時代に東京へ遊びに来たときも、別の店舗でしたけど、ショッピングしたり……」

「お店に来てくれたのね、ありがとう」

松田は少し表情を和らげたが、すぐにプロの目に戻った。

「つまり、店員であるあなた自身に顧客をつける、ということね。特定のスタッフのファンになってもらって、固定客にする。アパレルの店員っていうのはね、やり方次第でその界隈の有名人になれるの。もちろんここが東京だからってこともあるのよ。売り上げだって跳ね上がる」

松田はそこで言葉を区切り、値踏みするように彩佳を見た。

「ショップが仕掛けて、雑誌やSNSと連動していわゆる『読者モデル』的なアイコンに育っていく子も、他店には実際にいるわ。……まあ、読者なのにモデルっていうのも、おかしい言葉だけどね」

クスツと笑った松田だったが、すぐにその笑顔を消し、真剣な眼差しで彩佳を射抜いた。

「でも、確かに……あなたには、ちよつと特別な雰囲気があるわね」

「え……？」

彩佳は思わず視線を落とした。容姿については、大学時代からずっとコンプレックスの塊だった。誰の目を引くような華やかな美人ではない。むしろ平凡すぎる、と自分では思い込

んでいる。だからこそ、自分の足りない部分を補うためにファッションの力を信じてきたのだ。

「実はね」

松田は立ち上がり、丸テーブルの向こうから彩佳の全身をまじまじと見つめた。その指先が、空間に彩佳の輪郭を描くように滑らかに動く。

「あなたのそのバランス、すごく稀有よ。身長は、標準より少し高いくらい？」

「百六十五センチ、です」

「骨格がすごく華奢なのに、ちゃんと綺麗な筋肉がついていてしなやか。それ、うちで扱っているブランドのシルエットと相性が抜群なの。服が一番綺麗に見える体型よ」

セレクトショップ『リベルテ』。フランス語で「自由」を意味するその名を冠したショップは、都内を中心に十五店舗を展開している。

創業者は、かつて日本の大手アパレル企業でデザイン部門の責任者を務めていた高橋玲奈氏。二十年前に彼女が独立してこのブランドを立ち上げた際の理念は、「洗練されたアイテムで訪れる人々の日常に自由を提供する」というものだった。既存の流行に縛られず、着る人の個性を尊重する独自のスタイル提案——。現在は大手商社『丸鯨（まるしゃち）』のグループ傘下に入り、着実な経営資源を持ちながらも、その当初からのブランド哲学は失われていない。

バックヤードの壁にも、店のキャッチコピーである『自由な感性で、日常を愉しむ』という文字が、控えめなフォントで掲げられていた。

「ウチで扱っているブランドって、小柄な子には着こなしが難しいのよね」

松田は彩佳の全身から視線を戻し、再びスツールに腰掛けた。

「もちろん、それはブランドとしての今後の課題なんだけど……でもあなた、今のウチのコンセプトには本当にぴったり」

松田は手元の履歴書に、カチリと小気味よい音を立ててボールペンでチェックを入れた。

「あなた、採用よ。さっき新作のワンピースが入ってきたから、来週からの勤務に備えて、後で一回試着してみて」

「え……？」

あまりの展開の早さに、彩佳は驚いて顔を上げた。松田はそんな彩佳の動揺を楽しむように言葉を続ける。

「お顔立ちは……そうね。一見すると派手さはないし、エキゾチックな絶世の美女って感じではない。でも、圧倒的な清潔感がある。きれいで清楚なタイプね。おそらく、あなたを見て十人中七人は『美人だ』って言うんじゃないかしら。あ、ごめん、けなしてないのよ？ ナチュラルメイクなのに色白で肌がすごく綺麗だし、その飾らないロングボブもよく似合ってる。でもね、少し髪に色を入れて動きを出したりしたら、あなた、変わるわよ。いい美容室、紹介してあげる」

彩佳は呆然としながら、自分の頬にそっと指先を触れた。確かに昔から肌荒れとは無縁の体質だったが、まさか他人に、それもこんな洗練された都会の女性に褒められるなんて思ってもみなかった。

私のことを、美人だなんて思う人が、本当にいるんだろうか。

「決して押しつけがましくないのに、不思議と周囲の環境に溶け込む品の良さがある。そのくせ、芯の強そうな眼差しをしている。こういう子がね、化けると強いのだよ。押し売りはないのに、確実にお客様の心を掴む『カリスマ店員』になれるポテンシャルがある」

松田の言葉が、バックヤードの静かな空間に響く。

「そしてあなたが磨かれて綺麗になれば、あなたを信じて服を買ってくれたお客様も喜ぶ。そうやって固定客が増えていくの。ショップ店員って、そういう仕事よ」

ドクン、と彩佳の心臓が大きく跳ねた。

これまで地方の閉塞感の中で、ただ「牢獄から出たい」とだけ願っていた。自分の外見なんて、コンプレックスの対象でしかなかった。その容姿に、生まれて初めて「価値」と「意味」を与えられたような気がした。

「ただし……」

松田の声音が、一瞬でプロの厳しさを孕んだもの変わる。

「その素材を活かすためには、プロとしての知識と接客の技術が必要不可欠。特にあなたは、未経験の二十五歳なんだから。来週から徹底的に仕込むから、覚悟しておいてね」

「……はい！ よろしくお願いします」

深々と頭を下げ、面接は終わった。

バックヤードを出ると、表のショップフロアには、眩い照明の下で美しくディスプレイされた服たちが並んでいた。

時給制のアルバイト。アパレル業界の末端からのスタートだ。それでも、あの「生ぬるい牢獄」からは確実に抜け出した。彩佳は東京の真ん中で、確かに新しい一步を踏み出したのだ。

『リベルテ』は、渋谷の新たなランドマークである大規模商業施設『SCRAMBLE+（スクランブルプラス）』の五階にあった。

ハチ公口を出て、あの有名なスクランブル交差点を渡ると、嫌でもその巨大な建造物が視界に入ってくる。周囲のビル群を圧するような圧倒的な存在感。『+（プラス）』の文字が示す通り、渋谷の象徴にさらなる価値を上乘せし、「文化とビジネスの新たな融合」を目指して再開発された複合ビルだ。

メインフレームの大半を覆うクリアなガラスファサードは、昼間は都会の青空を反射し、夜になれば内側からの照明で現代アートのような幾何学模様を夜の街に浮かび上がらせる。一歩足を踏み入れれば、そこはもう地方のモールなどとは根本的に位相の違う別世界だった。地方のモールが流行に「乗る」ことを意識しているのだとしたら、こちらは流行を「作って」いるのだ。

「すごいな、本当に……」

見上げるような広大な吹き抜け。天井のガラス窓から贅沢に注ぐ自然光が、黒大理石で覆われたエレベーターホールを妖しく照らしている。歩くたびに、自分のヒールの足音が心地よく響いた。

施設の構造自体が、東京の多様性をそのまま凝縮したかのようにだった。

地下一階のライブハウスからは、夜ともなれば若手ミュージシャンたちの重低音が微かな地鳴りとなって階段を伝ってくるようだ。フロアのスペースを贅沢に使う一階のポップアツプスペースでは、週替わりで最新のアート展やトークショーが仕掛けられ、新しい話題をストリートへ発信し続けている。

エスカレーターを上るにつれて、彩佳の胸の高鳴りは速度を上げていく。

二階から十階までを占めるショップフロアは、まさに「都会の巨大なクロゼット」だった。国内外のトップブランドが独自の美学を競い合うように軒を連ね、それぞれの店頭ディスプレイはまるで美術館のインスタレーションのように洗練されている。フロアを一段上がるごとにコンセプトやインテリアの色彩や香りが変わり、歩いているだけで自分が特別な存在になったかのような錯覚さえ覚える。

さらに十五階以上の高層階は、大手企業がひしめくオフィスフロアになっていた。

平日の昼時ともなれば、洗練されたスーツやオフィスカジュアルに身を包んだビジネスパーソンたちが、十一階から十三階のレストランフロアへ向かってエスカレーターを行き交う。最先端のエンタメ、最先端のファッション、そして巨大な経済を動かすビジネス。そのすべてが、この一本のコンクリートの塔の中で激しく融け合っているのだ。

ふと屋上を見上げれば、渋谷の空を切り取るように巨大なLEDビジョン広告塔が設置されていた。

そこから放たれる鮮烈な光と映像は、夜の渋谷の闇を塗り替え、遠くからでもこの建物の位置を示す灯台の役目を果たしている。

「都会そのもの」が、この中にある。

先日まで役所の窓口で、ただ時間が過ぎるのを待っていた自分が、今はこの眩しさの中にいる。

『スクランブルプラス』の五階。新しく下ろしたてのスタッフ用パンプスに履き替えた彩佳にとって、それは想像を遥かに超えた、刺激的で目眩のするような日々の始まりだった。

東京の時間は、秋田のそれとは比べものにならない速さで流れていった。

彩佳は、わずか半年でアルバイトから契約社員へと昇格した。松田の予言通り、彼女には着実に固定客がつき始め、個人の売り上げも常に上位をキープするようになっていた。

「あなたの接客はね、全然グイグイ来ないのが逆にいいのよ」

確かに彩佳も自分が客として買い物をする時に、店に入っすぐ店員が声をかけてきて、積極的に商品説明しようとしてくると、逆に冷めてしまうし、「もう少しゆっくり見せてよ」と思うことがある。だから自分が接客するときには一歩引いた距離感を心がけていた。

「だからね。お客様が自分の意思でその服を選んだって、思えるの」

店長の松田は、コーヒーを飲みながら満足げに言った。

押し売りはせず、ただ静かに佇み、傾聴し、服のシルエットの美しさをその体で証明する。地方で培ってしまった「目立たないように、周囲に溶け込む」というかつての仕事スタイルも、東京の洗練された空間では、皮肉にも「品のある引き算の接客」という強力な武器に反転していた。

そして、上京して一年が経つ頃、運命がもう一段加速する。

ショップへの取材で店を訪れた編集者の目に留まったのだ。それが縁となり、二十代後半の働く女性をターゲットにした主要ファッション誌『bloom（ブルーム）』から、コーディネート企画のオフアールが舞い込んだ。

発売日、彩佳は仕上がった雑誌のページをバックヤードで開いた。

載っていたのは、決して大きくはない、カットの一つに過ぎない。それでも、全国の書店やコンビニに並ぶ本の中に、確かに「白石彩佳」という名前と自分の姿が印刷されていた。

「彩佳さん、雑誌見たよ！　すっごく素敵だった」

出勤すると、馴染みの客がわざわざ声を弾ませて報告してくれた。その笑顔を見たとき、胸の奥がじんわりと熱くなった。

二十五歳。若くもないし、まだまだ駆け出しの、ただの契約社員だけ……。

手に入れたのは「読者モデル」という、東京の大きさの中ではちっぽけな、けれど明確な称号だった。

実際のところ、契約社員になったとは言え、手取りの収入は秋田で公務員をしていた頃の給料にはわずかに及ばない。家賃や物価の高さを考えれば、生活はむしろカツカツだった。それでも、全国に流通するメディアに自分の存在が刻まれたという事実は、これまで砂を噛むような日々で飢えきっていた彩佳の承認欲求を、過不足なく満たしてくれた。

地元を飛び出して、本当によかった。

あの窮屈なスツールの上で始まった物語は、確かに別のステージへと動き始めていた。

今の彩佳にとって、その世界の中心は『リベルテ』のフロアだった。

店内に一歩足を踏み入れれば、明るすぎない暖色系のLEDライトが、ナチュラルウッドを基調とした什器を柔らかく照らし出している。売り場面積自体は決して広くはない。しかし、あえて通路幅をゆったりと広く確保することで、訪れた人々が他人の視線を気にせず、一枚の服と一対一で対峙できる贅沢なレイアウトが組まれていた。

スニーカーでもヒールでも、歩きたびにどこか心地よさを感じるのは、床に敷き詰められた木材調のタイルカーペットのおかげだった。上質な歩行感をもたらすだけでなく、ヒールの足音を適度に吸い込んでくれる防音効果もある。耳を澄ませば、アコースティックにアレンジされたロックやジャズのメロディが、静かなノイズのように空間に溶けていた。お客様が服を選ぶ、その集中を邪魔しないための計算された選曲だ。

そして、この空間を完成させているのは、「香り」だった。

ショップの奥にひっそりと置かれたハンドメイドのデイフューザーから、柑橘系とラベンダーをブレンドしたオリジナルフレグランスが、かすかに、途切れることなく漂っている。強すぎない、まるで異国の果樹園に迷い込んだかのような自然な残り香。

光、音、床の感触、そして香り。

それらすべてが完璧に調和した空間で、洗練された洋服たちに囲まれて佇む。自分がその完璧な世界の一部として機能している事実には、彩佳は毎日、静かな高揚感を覚え続けていた。

ある日のランチタイム。彩佳は『スクランブルプラス』の従業員用食堂の片隅で、持参したタッパーの蓋を開けていた。

契約社員になったとはいえ、給料は決して高くない。東京の物価に圧倒されている彩佳は、基本的に三食すべてを自炊で通し、昼はこうしてささやかなお弁当を作って持ってきていた。週末を控えた金曜日、新規テナントのオープンやイベントの準備が重なったせい、食堂はいつも以上の熱気と混雑に包まれている。

「ここ、空いてますか？」

周囲の空気がそこだけパツと華やぐような、快活な声が降ってきた。

見上げると、彩佳よりも五歳は若そうな、信じられないほど綺麗な女の子がトレイを持って立っていた。

あ、この子……。

今朝、新店オープンの挨拶回りで『リベルテ』のバックヤードを訪れたスタッフの一人だった。彩佳が働くショップと同じ五階に、今日からテナントを構えた『Vogue & Verve（ヴ
ォーグ&ヴァーヴ）』の店員だ。

「『ヴォーグ&ヴァーヴ』の工藤美玖です。朝、お会いしましたよね」

美玖は、おそらく自店の取り扱いブランドなのだろう、ブルーの愛らしいワンピースを完璧に着こなしていた。『リベルテ』よりはややターゲット層が若く、トレンドを前面に押し出したブランドだ。

セミロングの茶髪に、くつきりとした目鼻立ち。ぱっちりとした瞳と整った小顔のバランスは、そのままどこかの芸能事務所に所属していてもおかしくない。立っているだけで絵になる、二十歳か少し上くらいの女性だった。

「私、白石彩佳です。さっきはわざわざご挨拶にありがとうございました。どうぞ、座って」
「ありがとうございます。それにしても混んでますね、いつもこんな感じなんですか？」
「今日はイベントが重なったからじゃないかな。金曜日だしね。普段はもうちよっと空いてるよ」

美玖は向かい合わせに腰掛け、持参したタッパーの蓋を開けた。中に並んでいたのは、少量のサラダチキンとブロッコリーだけだった。

「それ……足りるの？」

他人の食事に口を挟むのは失礼だと思いつつも、あまりの少なさに思わず声が出た。

「私、いつもこれなんです。食物繊維とタンパク質だけは取れるし、毎日メニューを考えなくていいから楽なんですよ」

「大丈夫？　立ち仕事って結構体力使うでしょ？　お腹空かない？」

「でも、もっと痩せないといけないんですよね……」

「十分痩せてるのに。私こそ今すぐダイエットしなきゃいけないくらい」

「何言ってるんですか、白石さんこそすっごくスタイルいいじゃないですか！」

「よくないよ。夕方になると足はパンパンにむくんじゃうし、お腹の肉だってなかなか落ちないんだから。スタイルよく見えるとしたら、それは服のデザインのおかげだよ」

謙遜ではなく本音だった。彩佳の目から見て、美玖はすでに完成された体型だった。その上、このルックス。松田店長の言っていた「カリスマ店員の卵」とは、まさにこういう子のことを指すのだろう。

「でも、お弁当作ってくるなんてすごいですね。尊敬しちゃう」

「ある程度まとめて作って、冷凍しておくだけだよ。その方が経済的だから」

そんな他愛のない世間話を交わしながら、二人はランチを進めた。

目の前でブロッコリーを口に運ぶ美玖を見つめながら、彩佳の胸の奥にしずくが落ちるような感覚があった。

きつと、こういう子が読者モデルになったり、ショップの顔になっていくんだろうな……
東京って、すごいな。

美玖が東京出身なのか、あるいは自分と同じように地方から出てきたのかはわからない。
しかし彩佳は、この若くて美しい女性の登場に、東京の「底知れなさ」を感じずにはいられなかった。

いくらでも代わりがいる、眩しい人材が掃いて捨てるほど集まる街。スタイルが良くて、顔が小さくて、そして自分より五歳も若い。

四十五分の昼休憩は、あっという間に過ぎ去った。食事を片付け、二人は席を立つ。

「お互い、午後からも頑張りましょうね」

「うん、頑張ろうね」

別れ際、互いの健闘を称え合うように小さく手を振った。

美玖の引き締まったお尻を見送りながら、彩佳は自分のパンプスのつま先に視線を落とす。私も、負けてられない。頑張らなきゃ。

小さな称号を手に入れて満足しかけていた自分に、関東平野を抜ける風が、再び心地よい緊張感を与えてくれたようだった。

秋風が街路樹の銀杏を鮮やかな金色に染め上げる頃、彩佳は自分がいつの間にか「東京の風景」の一部になっていることに気づいた。

すっかり東京の速度に馴染み、街を満喫している。地方から出てきた当初、何を身に纏っても周囲に気後れしていたコンプレックスの塊のような面影は、もうどこにもなかった。

『リベルテ』のバックヤード。ロッカーの前で、今日入荷したばかりの新作ジャケットに腕を通す。鏡に映る自分の表情は、驚くほど穏やかで、そして自信に満ちていた。

彩佳がファッションやメイクに心血を注ぐようになったのは、この巨大で高度な資本主義の街で、賢く、しぶとく生き抜くと決心したからだ。気づけば、新宿や渋谷の雑踏に溶け込む、洗練された「都会の空気感」が自然と身体に染みついていった。

「店長、見てくださいよこれ。昨日やっと手に入れた新作のトレンチコートなんです！」

スマホの画面を松田の前に突き出し、彩佳は興奮気味に語りかける。一年前なら、ゼロの数を見て買うのを躊躇していたような価格帯のアウトター。今の彩佳がそこに求めているのは、値段の妥当性ではなく、素材の質感と、自分の体型に似合うシルエットの美しさだった。

松田は苦笑しながらも、その画面を覗き込んで目を細める。

「いいじゃない。そのトレンチなら、下は長めのスカートでもパンツでも合いそう。それからね……」

師匠から弟子への奥義の伝授のように、容赦のない、それでいて、愛のあるファッションの授業。それは毎日のようにバックヤードで繰り広げられた。スポンジが水を吸うように、彩佳が東京のモードに順応していく速度は、松田の予想を遥かに超えていた。

とりわけ、メイクに対する情熱は爆発したような凄まじさだった。地方の大学を卒業する頃には、ファンデーションすらまともに塗れなかったのだ。それが今では、同僚や顧客からメイクの相談を受けることさえ珍しくない。

自宅の鏡台の前で、新調したアイシャドウを試しながら、自分の目元を様々な角度から吟味する。ピンク系のグロスに映える明るめのチークを選び抜き、まつ毛エクステの長さや角度にもこだわる。それは義務としての身だしなみではなく、「自分」という作品をミリ単位で構築していく、刺激的な創作活動だった。

「よし、これで完成」

最後の一笔を加えるようにリップを塗り終わると、彩佳は鏡の中の自分に、満足げな微笑みを投げかけた。

この顔で、今日という貴重な一日を過ごす。

その実感が、胸の奥で静かに、そして熱く弾けた。

まるで自分が、お洒落な連続ドラマのヒロインにでも選ばれたかのような錯覚。その高揚感が、指先から全身へと快感となって駆け抜けていく。

このとき彩佳が感じていた圧倒的な充足感は、単なる外見への執着を置き去りにした、もっと別の、自らの足で人生の主導権を握り締めているという充実感に近い何かだった。

第二章 友情

「お姉さん、新規さんですか？」

大音量のサウンドが鳴り響く前の、まだ静けさが残るフロアで、最初に話しかけてきたのは彼女の方だった。場所は『スクランブルプラス』の地下一階。地上階の洗練された賑わいとは打って変わり、コンクリート剥き出しの壁に重低音が共鳴する地下ライブスタジオだ。

それが、桜井真由との出会いだった。

話してみれば、彼女は都内の高名な音楽大学に通う、声楽科の大学院生だという。彩佳がこの地下に足を踏み入れたのは、本当にただの偶然だった。自分が働くビルの地下で

『Neon Circuit（ネオンサーキット）』という名の地下アイドルがライブを行うと知り、仕事終わりに軽い気持ちで電子チケットを申し込んだら、拍子抜けするほど簡単に取れてしまったのだ。しかし、そこで目撃した彼女たちのパフォーマンスは、思いのほか彩佳の胸の奥深くに突き刺さった。今日が、二回目のライブ参戦だった。

「二回目です」

「私は、二十七回目」

真由は、ドヤ顔で数字を口にした。

「ええっ？ 多すぎ！ 彼女たち、まだそんなに長く活動してないですよね？」

「ここに進出してくる前、三軒茶屋の小さな地下の箱でやってた頃からのファンだから。小さな箱って言っても、本当に信じられないくらい狭くてボロいのよ。ライブハウスの名前だ

けは『ドゥーム』なんて大層な名前がついているくせに、機材はガタがきてるし、おまけにトイレはいつ行っても信じられないくらい汚くて臭くて。私なんてさ、ライブハウスの壁をゴキブリが全力疾走してるの目撃しちゃったからね」

真由は手振りを交えながら言葉を続ける。

「ステージの上で、アイドルが命がけで歌って踊っている真横の壁を、ゴキブリが並走してるのよ？　どんな世界線よ、それ」

「しかも最初の頃なんて、ステージの上の彼女たちより、フロアにいる客の数の方が少ないんだから。メンバー七人でしょ？　客、四人。地獄よね。どっちが観客だか分からない。あの時は、壁のゴキブリも入場料払って観客として数えてあげなきゃ割に合わないって本気で思ったもん」

「あと、大雨の日にステージの真ん中に雨漏り用のバケツが置かれた時もね、私それ見た瞬間、頭がバグリそうになっちゃって。いつの時代だよ、ここ二十一世紀の東京だよね？って心の中で叫んじゃった」

彩佳は耐えきれず、ふっと吹き出してしまった。

何、この子。めっちゃくちゃ面白いな。

年齢は自分と同じくらいか、あるいはわずかに下だろうか。声楽をやっているせいか、華奢な見た目に反して声の通りがとても良い。身長は彩佳より五センチほど低く見えたが、それでも百六十センチは確実に超えているはずだ。彩佳が女性としては高身長の種類に入るため、並んで歩くにはちょうどいいバランスだった。

さっぱりとしたショートカットが驚くほどよく似合う真由は、彩佳の全身を上から下まで興味深そうに眺めると、目を輝かせた。

「お姉さん、すごくスタイルいいよね。もしかして、モデルさんとか？」

「ううん、しがないショップ店員だよ。この上の五階の店で働いてるの」

「やっぱり！ 絶対アパレル関係だと思った。オーラが一般人と違うもん」

「でも、いい歳して正社員でもない、ただの契約社員だけどね」

公務員の安定を捨てて、東京の不安定に飛び込んだ自嘲が、無意識に言葉の端から漏れた。しかし真由は、それを一瞬で笑い飛ばした。

「いいじゃん、契約社員！　その方が絶対気楽だよ。今の時代、一つの会社に縛られる方がリスクだしさ。万が一、店に頭のおかしい客が来たら、速攻で違う店に移ればいいだけの話じゃん！」

その屈託のない、あまりにも前向きな割り切り方に、彩佳の胸の支えがすつと軽くなったような気がした。

ライブが終わった後、二人はその熱気と興奮をそのまま引きずるように、渋谷の街へ繰り出し、近くのビアホールへ直行した。大きなジョッキを傾けながら語り合う時間は、驚くほど滑らかに流れていった。

真由は、第一印象の通りどこまでも気さくで、明るく、嘘のない爽やかな女の子だった。

好きな音楽のこと、東京の家賃の高さのこと、他愛のない愚痴。話題は尽きることなく、二人の波長は面白いほどに噛み合った。

冷たいビールを喉に流し込みながら、彩佳はふと、胸の奥で温かいものが広がるのを感じていた。

上京して以来、彼女の周囲にいたのは、憧れであり厳しくもある店長の松田や、気を遣う同僚、あるいは利害関係の発生するお客様や取引先だけだった。常に「都会の女」としての装いを求められる緊張感の中にいた。

でも、目の前で唐揚げを頬張っている真由は違う。

これが、東京に出てきて初めてできた、肩書きも利害も関係のない、本当の意味での「友達」という存在だった。深夜の渋谷の喧騒の中で、彩佳は自分がこの街に、さらに深く根を張ったような確かな手応えを感じていた。

「彩佳！ 今日のライブ、マジで最高すぎなかった！？」

興奮の余熱をそのまま夜風にはらませた帰り道、渋谷のセンター街の喧騒の中を歩きながら、隣の桜井真由が弾けた笑顔で振り返った。

あの日、『スクランブルプラス』の地下で偶然隣り合わせて以来、二人のスケジュールには「月二回の地下ライブ参戦」という不可侵の習慣が組み込まれていた。

彼女たちが熱狂している、七人組の女性アイドルユニット『ネオンサーキット』は、結成四年目を迎え、最近ではここ『スクランブルプラス』の地下ライブハウスを実質的なホームグラウンドとして、定期公演を打てるまでに成長していた。三軒茶屋のボロいライブハウス時代から彼女たちを支えてきた真由のような古参ファンが分厚い地盤となり、そこに最近のメディア露出や立地の良さも手伝って、彩佳のような新規のファンが怒濤の勢いで流れ込んでいる。フロアの熱気は、今まさに臨界点を迎えようとしていた。

「それにしてもさ、彩佳ってばホントにレイナ様推しで固まったよねー」

真由がニヤニヤと意地悪そうな笑みを浮かべ、彩佳の脇腹を小突いてくる。

——レイナ様。最年少にして絶対的なセンター。確かにめちゃくちゃに可愛いが、そもそもメンバー全員がファンから「様」付けで呼ばれるアイドルグループというのも珍しい。

「ちょっと、からかわないでよ。レイナ様は単にいつもセンターのポジションにいるから、一番視界に入りやすくて見えやすいだけだってば」

彩佳は半分照れ隠しの混じった言い訳を返した。だが、本当の理由は別にあった。レイナ様の持つ独特の危うげな佇まいや、ふとした瞬間の気の強い眼差しが、秋田の高校時代に可愛がっていた部活の後輩に、どこか酷似していたのだ。

『ネオンサーキット』は、動員が増えたとはいえ、世間一般の認知度から見ればまだまだ「地下アイドル」の域を脱していない。だからこそ、彩佳は彼女たちに、かつて何者でもなかった自分自身の姿を無意識のうちに投影していた。

何もない地方の閉塞感の中で、ただ未来を夢見て燦っていたあの頃の自分。

そんな過去の記憶と、目の前のステージで汗を飛ばしながら必死に歌う女の子たちの姿が、重なって見えて仕方がなかった。特に後輩に似たレイナ様が、スポットライトを浴びて輝く瞬間は、まるで自分の過去が払拭されていくような奇妙なカタルシスさえ覚える。

フロアの最前線でファンと一体になって拳を突き上げ、地鳴りのようなコールを送り、ライブが終わればファンイベントへと足を運ぶ。ほんの十数秒、直接言葉を交わし、彼女たちの手から直接グッズを買い求める―その距離の近さが、彩佳の胸に強烈な現実感を与えてくれた。

最初はただの気晴らしのつもりだった。それが、地道な活動が続けてきた女の子たちが、動員を増やし、より大きなステージへとステップアップしていくプロセスを特等席で目撃するうちに、それは彩佳の東京生活にとってなくてはならない「推し活」という名の精神的支

柱へと変わっていった。彼女たちの成長は、そのまま自分が東京という街で生き抜いていくためのエネルギーそのものになっていた。

「ところでさあ」

原宿方面へ向かって歩き出した真由が、街灯の下で突然足を止めた。くると振り返った彼女の瞳に、いたずらっぽい光が灯る。

「彩佳ってさ、マツチングアプリとかやってる？」

「はい？」

唐突な問いかけに、彩佳は間拔けた声を上げた。戸惑う彩佳を気にも留めず、真由は慣れた手つきでスマホを取り出し、液晶画面をこちらに突き出してきた。

「今時の女子の基本装備だよ？ ほら、この『パートナーズ』ってやつなんか、セキユリテイもしっかりしてて初心者向けだし」

「いや……でも、そういうのってなんか騙されそうだし、いわゆる『出会い系』みたいでちよつと怖いかな」

「違う違う、認識が古いつて！ 今時アプリで付き合ったり結婚したりする人がどれだけ多いか知らないの？ リアルな出会いと同じくらい、下手したらそれ以上に普通なんだから」

真由はさらに一步距離を詰め、目を輝かせた。

「むしろ、彩佳みたいな真面目で慎重な子こそ使うべきなの。私の音大の友達も、これ使ってめちゃくちゃ気が合う素敵な人と付き合ってるんだから！」

確かに、東京に出てきてからの行動範囲は、職場と、真由と遊ぶことと、あとはライブハウスの往復だけだ。職場以外の人脈を作るという意味では、真由の言うことも一理あるのかもしれない。理屈としては理解できた。しかし、日々の生活を生き抜くことで精一杯だった今の彩佳にとって、「恋人探し」という発想そのものが、どこか遠い世界の出来事のように思えてならなかった。

「試しに登録だけ！　ね？　一回やってみようよ」

「……まあ、お試しで、登録するだけなら」

熱量に根負けした彩佳がそう呟くと、真由は「よし！」と満面の笑みで親指を立てた。

その夜、狭いワンルームのアパートに帰宅した彩佳は、ベッドの上に寝転がりながら言われた通りにアプリをダウンロードした。画面の指示に従って、淡々とプロフィールの文字を埋めていく。

<秋田県出身、二十六歳。都内でアパレル（ショップ店員）勤務。趣味はファッションと、アイドルのライブ鑑賞です>

さすがに自分の顔写真をネットに出すことには強い抵抗があり、数年前に実家で飼っていた猫の写真を代わりに設定した。

それから、一週間が経った。

夕方、バックヤードでの片付けを終えた彩佳は、ため息混じりにスマホの画面をスクロールしていた。

プロフィール文だけは完璧に整えて待機していたというのに、届くのは冷やかしゃ、一目で警戒を要すると分かるような失礼なメッセージばかり。まともなアプローチは、驚くほどゼロだった。

まあ、写真も登録していないし……。考えてみれば当たり前か……。

画面の向こうには、女子大生や、大手企業の丸の内OL、CAといった、いかにも華やかな肩書きの女性たちが溢れ返っている。そんなキラキラした競合たちに比べれば、二十六歳のしがないショップ店員など、モブキャラの一つに過ぎないのだろう。

何より、いまの自分の年齢の現実が、重くのしかかる。アプリという冷徹な市場においては、二十二歳や二十三歳の圧倒的な若さの前に、自分の歩んできた二十六年間など、なんのアドバンテージにもならないのかもしれない。

ふと、同じフロアの『ヴォーグ&ヴァーグ』で働く、あの工藤美玖の顔が脳裏をよぎった。美玖ちゃんみたいな子が登録したら、一瞬で男の人が群がるんだろうな。美人で顔も小さくて、私より五歳も若くて……。

そこまで考えて、彩佳は自分の思考の卑屈さに嫌気がさし、小さく首を振った。気が滅入るだけだ。

「やっぱり……ちゃんと顔写真を載せなきゃ駄目なのかな」
ロッカーの鏡に映る、メイクの行き届いた自分の顔を見つめる。

しかし、どうしても最後の一步を踏み出せない。本来の保守的で臆病な性格が、ブレーキをかける。こういう人間関係は、石橋を叩いて渡るくらい慎重に進めたいのが本音だった。

そもそも、自分は恋活や婚活をしに東京へ来たわけじゃない。マッチングアプリだって、まずは趣味の合う異性の友達作り、そのための大義名分として始めただ――。

スマホの画面を伏せ、自分に言い訳をするようにベッドへ深く沈み込む。天井を見上げながら、彩佳は東京という街の広さと、その中で感じる奇妙な孤独感を、改めて噛み締めていた。

翌週のオフの日。彩佳は真由に誘われ、彼女が通う音大のキャンパスを訪れていた。

敷地内にある一般開放されたカフェテリアは、ガラス張りのモダンな建築で、緑豊かな中庭を見下ろす洗練された空間だった。パスタがメインのお昼のランチコースで始まった、束の間の女子会。

推しのアイドルの最新情報から、渋谷の安くて美味しいダイニングバーの話、いつか行ってみたみたいアジアの国々のこと、そして日々の仕事の愚痴。一通り互いの近況を吐き出し合う時間は、どこまでも心地よかった。

どれだけ言葉を交わしても、まだ話し足りない。時間が砂時計からこぼれ落ちるように、あっという間に過ぎていく。東京という巨大な街で、これほどまでに波長の合う人間と巡り会えるなんて、上京前の自分には想像もつかなかった。

地方にいた頃の彩佳は、都会の人間関係を「冷淡で希薄なもの」と決めつけていた。しかし、現実違った。互いが心を拓き、気質さえ合致すれば、東京の真ん中でだってこんなにも親密な温もりを築くことができる。

カリスマ店員の道を示してくれた松田や職場の仲間たち、そして、今日の前で笑っている真由。上京して、自らの手で一から手繰り寄せてきた人間関係は、無機質な都会の高層ビル群の狭間で、今の彩佳にとって何よりも尊い財産だった。

「それにしてもさ、なんで彩佳には彼氏ができないんだろぅね？　ぶっちゃけ何年いないのよ」

真由がカップを置き、心底不思議そうに首を傾げてきた。

「えっ？　突然、何その質問……」

「だって、こんなに美人なのに！」

「美人じゃないってば。本当に普通だから」

真由は日替わりのボロネーゼのパスタを器用にフォークでくるくる巻きながら、言葉を重ねる。

「背が高くてスタイル抜群だし、佇まいが上品。肌もつやつやで綺麗だし、メイクだってプロじゃん。元々の素材が違いすぎるんだって。高校とか大学時代、絶対に死ぬほどモテたでしょ？」

「それは本当に買い被りすぎだよ」

彩佳は苦笑して紅茶を啜った。

実際、学生時代に告白された経験がゼロというわけではない。だが、そのすべてを断ってきた理由は、至ってシンプルだった。

本当に好きになれる男が、一人もいなかったのだ。

それどころか、そんな中でさえ「いいな」と淡い好意を抱く相手には、決まって別の女の影があった。高校時代の部活の先輩も、大学のサークルの先輩もそうだった。器用に二股をかけられそうになったことすらある。

これまでの人生で、男性と交際した経験が全くないわけではない。しかし、その数少ない記憶も、彩佳自身が相手に夢中になれず、ただ義務感のようにデートを重ねた末に自然消滅していく、退屈なものばかりだった。

「でも……」と、彩佳はカップを見つめたまま、小さく呟いた。

「東京の生活にもすっかり慣れてきたし、そろそろ、いい人がいれば、ちゃんと付き合ってみるのもいいかな、とは思いついてるんだよね」

その言葉を聞いた瞬間、真由の顔がパツと輝いた。

「ほんとに やった！　じゃあ、今度こっちの音大繋がりとかで、良さそうな男の人集めて合コンセッティングするから。任せて！」

「あはは、本当にお手柔らかにお願いします」

彩佳は素直に両手を合わせて頭を下げた。

義理でインストールしたきり、スマートフォン画面の片隅で眠っていたマツチングアップリ。

しばらく放置していたものの、二十六歳という年齢に対する得体の知れない焦燥感や、東京という街で「自ら動かなければ何も始まらない」という強迫観念に駆られ、彩佳は再びアプリのアイコンをタップしていた。

べつに、画面の向こうに運命の出会いを賭けているわけではない。どこか冷めた自覚はありつつも、それでも以前に比べれば、届くメッセージに対して積極的に、丁寧に応じるようになっていた。不躰な男たちをスクリーンングし、趣味や波長の合いそうな相手を慎重に見極める。そうして文字のやり取りを重ねていた一人の男性と、週末、実際に会うことが決まった。

「すみません、お待たせしました。白石彩佳さんですよね？」

青山のお洒落なカフェ。現れたのは、プロフィール写真以上に清潔感があり、『マッチングアプリでの正解』を極めたような男だった。

「当馬伸（とうましん）です」と、会社の名刺を差し出してきた。

大手銀行の品川支店融資課と書かれている。

当馬伸、三十歳。メガバンク勤務。短く整えられた黒髪に、シワ一つない水色のシャツ。顔立ちだってすごいイケメンというわけではないが、清潔感があって、整っている。そして仄かにいい香りがしている。誰もが知っている有名な香水という感じはしなかったが、自分に合う香りを決めているのだろう。袖口から覗く時計も、嫌味にならない程度に上質だ。ロレックスやオメガなどのスイス時計ではないが、おそらく国産の高級時計を身につけている。彩佳は以前、聞いたことがある。商売をしている人はお客さんよりも高価な時計を身につけ

てはいけないということを。しかし安価すぎる時計では信用を得られない。その意味で、いくら高級時計とはいえ、国産時計をつけた彼は隙のない選択をしているように思えた。

「いえ、私も今着いたところです」

彩佳は努めて穏やかに微笑んだ。

「銀行ってお忙しいんでしょう」

彩佳は全く銀行の知識がなく、月並みな質問を投げかけた。

「いえ、遅くても八時か九時くらいまでなので知れてますよ。今は働き方改革で一昔前のようなブラックなことはありません」

「そうなんですね。よかったです」

彩佳はそう言っておきながら、自分の感情の薄さに気づいていた。何が良かったのだろう。私はまだこの人のことを何も知らないのに。

「白石さんもわざわざお店今日はお休みいただいたんですか」

当馬伸は爽やかな笑顔で尋ねる。

「いえ、私は休みが平日のことが多いので……」

一か月前、真由に半ば強引に設定をいじられ、結局「猫の写真」から「読者モデルをした時の雑誌の写メ」に差し替えた途端、マッチングしたなかで一番まともそうなのが彼だった。

「……実物は、写真よりずっと素敵ですね」

メニューを開く前に、彼はそう言って彩佳を正面から見据えた。その視線は熱烈というより、どこか銀行の融資係が中小企業の財務諸表をチェックするような冷静さを含んでいる。

「ありがとうございます。でも、あれはプロのメイクさんが時間をかけて頑張って下さっただけですから」

「いやでも、素材がよくないといくらメイクしたって限界がありますよ」

「そういうものでしょうか。でも私は別にどちらかといえば目立たない方ですし」

「いや、分かりますよ。僕、仕事柄たくさんの人に会いますが、白石さんみたいな『控えめなのに華があるタイプ』は、今の時代なかなか貴重です」

控えめなのに華がある？褒められるのは嬉しいけれど、第一印象で、何がわかるの？

注文を終えると、彼は流れるような手際で会話をリードした。最近流行りの飲食店、流行っている映画の話、配信ドラマの話、音楽の話、趣味だというゴルフのこと。学生時代に海外旅行にいきまくっていたこと。話題も豊富で、また話し方も上手で、同世代の女性なら

「当たり前」を引いたと喜びそうな相手だった。当初は警戒していた彩佳も思わず、話して一瞬は楽しいと思ったほどだった。

話題が一段落した後、彼は銀行での仕事のこと、より突っ込んだ仕事観、将来のライフプランについて語りはじめた。

「僕は、男は仕事で評価されて初めて価値があると思っています。だから仕事は一生懸命やりたい。あ、でも、もちろん、共働き〇不ですよ」

……共働き〇不。それって許可されるものなのかな。

「会社が行けと言えば、地方にだって行くこともあるだろうし、海外にだって。あ、いや、海外はむしろ行きたいくらいです」

もし万が一、この人と結婚したら、私の意思は関係なく、海外についていくのかな。

「僕は、女性も自分の仕事を持つべきだと思うんです。僕の母は専業主婦だったけど……。もし結婚して共働きだったら、僕は家事も協力しますし。僕、こう見えて休みの日はスパイスカレー作ったりするんですよ」

協力……。自分が作りたい料理を作るだけじゃないかしら。

言葉の一つ一つが、刺のように、彩佳の胸に小さな違和感となって刺さる。

彼は会話に、彩佳のプロフィール写真のことを混ぜてきた。

「あの写真って、すごくプロっぽいか、何かのメディアに出たものですか。それか美容室のモデルなんか、されてますか？」

「実は、私、読者モデルみたいなことをしたことがあって、その時の写真です」

隠すのもおかしい気がして、過去に読者モデルとして掲載された、女性誌『ブルーム』の話をした。

「大手の出版社の雑誌じゃないですか。その雑誌、僕の姉も読んでいて。すごい。ショップ店員をしながら読者モデルもこなすなんて、セルフプロデュースが上手い証拠ですよ。そういう『意識の高い人』は、生活もきつと丁寧なんだろうな」

当馬からは、元々、交際に乗る気な雰囲気を感じていたが、彩佳が一回だけ務めた読者モデルという肩書は、想像以上に彼のテンションをさらに高めたようだった。

しかし、彩佳は反対に冷めていた。彼は彩佳の内面を褒めているようでいて、その実、「読者モデルという肩書きを持つ、美しい恋人、綺麗な奥さん」という、彼なりの成功を求めているだけではないのか。

「あの、当馬さん。『意識が高い』だなんて。私、モデルはあくまで仕事の延長で引き受けただけで、普段はただの販売員なんです。休みだって不定期だし、女友達と地下アイドルのライブで大騒ぎして、家でそのアイドルのライブのDVDを観ながらだらだら過ごすのが一番の幸せで」

「ははは、でも、それもギャップがあっていいじゃないですか」

「今度、アイドルのライブ、誘ってくださいよ」

当馬は爽やかに笑って、彩佳の言葉を軽くいなした。

この人と私の好きなアイドルのライブに行く？絶対興味ないし。無理かも。だって、地下アイドルだよ。絶対に引く……。

「今はそれでいいんです。でもお互い、結婚して落ち着けば、きっと価値観も変わっていくものですよ。『意識の高い』白石さんなら、僕の言っていることの意味、分かってくれますよね？」

彩佳はティーカップを唇に運んだ。

紅茶は香りが良く、確かに美味しい。目の前の男も、小さな違和感を別にすれば、大きな問題はないように思えた。

それなのに、彩佳の心は、ライブハウスの爆音の中で汗をかいていた時よりもずっと、寒々しい疎外感に包まれていた。

表参道の交差点へと向かう人波の中で、彩佳は言いようのない焦燥感に包まれます。

条件は悪くない。印象も悪くない。経済的にも文句ない。彩佳の二十六歳という、いまは売り時ではあるが、今後価値が落ちていくであろう、微妙な年齢を考えて、客観的に見れば「合格点」の相手。三十歳という年齢も問題ない。それなのに、心に広がるのは霧のような不安だけ―。

また相手にとっても、自分が読者モデル経験があつて、まだ二十六歳なのは、三十歳と違って、『マツチングアプリでの正解』ひとつなのかもしれない。

彩佳の心は揺れていた。

「再来週の土曜日。彩佳さんが興味を持ってくれたイタリアンの店、予約が取れたら、連絡するよ」

今日のカフェでの初めての顔合わせが終わる頃、当馬が彼女を呼ぶときの呼称が「白石さん」から「彩佳さん」に変わっていた。

「じゃあ、気を付けて」

当馬は最後まで爽やかな足取りで、地下鉄の入り口へと消えていった。

一人残された彩佳は、行き交う人々の波をぼんやりと眺める。

東京で男性と知り合うって、みんなこんな感じなのかな……

誰かが設定した「理想の条件」をフィルターにかけて、マッチングした相手と一時間ほどお茶を飲み、履歴書を確認し合うような会話をする。それでたまたま気が合えば、手を繋ぎ、付き合い、デートを重ね、結婚し、子供ができる。

そんな、生産の工程表をなぞるような人生の進め方が、今の自分にはあまりにも現実味を欠いて見えた。

確かに当馬は好青年だった。

年齢も少し上で、メガバンク勤務という肩書きは、もし結婚を前提に付き合うとなれば、地方出身の彩佳の両親に伝えれば喜ぶであろう「安定」そのものだ。性格も決して悪くない。話も上手だし、優しそうだし、いい人そうだ。あの様子なら、結婚すれば彼は彼なりのやり方で、彩佳を大事に扱ってくれるだろう。愛情だって、次第に湧いてくるはずだ。

でも、私が求めているのは、そんな『安定』なんだっけ？

ふと、自分の指先を見る。

毎日、何十着もの服を畳み、検品し、顧客の体型や悩みに合わせてコーディネートを提案する。立ち仕事で足はむくむし、契約社員という立場に将来の保証なんてない。それでも、売れたら嬉しいし、固定客が自分についてくれることも充実感があるし、何より、自分の選んだ服が誰かの一日を彩る瞬間に立ち会えるこの仕事が、彩佳は好きだった。その先にある「何か」。まだ名前もついていない、自分の力で掴み取るキャリアのようなものを見てみたかった。

当馬の語る「家庭」という理想の中に、このアパレルショップの店頭で一喜一憂し、もがいている白石彩佳の居場所はないのではないか。

『今日は楽しかったです。また会いたいです。』

スマホに届いた彼からの礼儀正しいメッセージに、彩佳は指を止める。

「何かが違う」と、喉元まで出かかっている言葉がある。だが、それを飲み込んで、彼女は定型文に近い返信を打ち込んだ。

『はい、こちらこそ。よろしく願います。』

結局、初回では断れなかった。

自分の二十六歳という年齢。当馬の自信に満ちた表情。親友、真由の期待。田舎の両親の顔。

それらすべてが重石となって、彩佳の背中を「安定」という名の出口へと押し流していく。再来週のデートの日時が決まる。

喜びよりも先に、重たい溜息が一つ、春の夜の湿った空気に溶けて消えた。

それから数日。

帰りの電車の中、バッグの中でスマホが小刻みに震え続けている。

真由に「もし今回、当馬さんが無理だったらどんどん次いこ。写真も盛ろう。絶対こっちの方が映えるから！」と半ば強引に書き換えられたプロフィール。

『読者モデル』という一文と、プロの照明の下で微笑む別カットの写真は、マッチングアプリという海の中で、飢えた魚たちを引き寄せるあまりにも強力な撒き餌（マキエ）となった。

「……うわ」

画面を開くと、そこにはこれまでの沈黙が嘘のような、無数のメッセージ。しかし、その中身をスクロールするほどに、彩佳の指先は勢いを失っていった。

いかにも夜の街で遊んでいそうな自撮りを載せる男。年収千二百万円を自慢する自称スタートアップ企業の立ち上げメンバーの四十代の男。「二十代の方限定で」と強気の五〇代独身男性。三十代無職の「夢追い人」。実家での生活感が滲み出る四十代の「子供部屋おじさん」。「子供は二人欲しいです」という六十代男性。

玉石混交。いや、そこら辺の石ばかりが積み上がっていく。

『あれ、プロフと写真変えた？』

通知の列に交じって、当馬からのメッセージがあった。

『さらに綺麗でびっくりしたよ。競争率が上がっちゃって困るなあ（笑）。でも実物はもっと綺麗なことを俺は知っているよ。来週、楽しみにしてるよ』

その余裕のあるメッセージを見て、彩佳は皮肉にも彼が「一番マシ」であることを再確認してしまふ。

清潔感があり、きちんとした仕事に就き、会話のキャッチボールができる。それだけで、この狂ったような通知の渦の中にいる有象無象の男たちに比べれば、ぶっちぎりの一位。当馬は間違いなく相当な「優良物件」だ。

でも……本当にそれだけで決めていいの？

電車がトンネルに入り、暗くなった窓ガラスに自分の顔が映る。プロに作ってもらった「読者モデルの自分」が、どこか他人事のような顔でこちらを見返していた。

今の自分は、市場価値という物差しで測られ、スペックを比較され、消去法で「一番マシな選択肢」を選ぼうとしているだけではないのか。

一ヶ月前、ライブハウスで真由と肩を並べ、『ネオンサーキット』の曲に拳を突き出して
いた時の、あの自分の内側から湧き上がるような熱量。

自分の好きな服を選び、誇りを持って店頭に立っている時の、あの地に足のついた感覚。
それらが、このスマホの画面の中には一切存在しない。

「……疲れた」

最寄り駅に着き、彩佳は通知を切った。重い足取りで改札を抜けながら、彼女は秋田の実
家で飼っていた猫のことを思い出す。ただそこにいるだけで愛され、誰とも比較されなかつ
たあの場所。

ふと、またあのジンクスが頭をよぎる。

「好きになる男には、なぜか別の女の影があった」

今は好きになる男がいない。そして皮肉なことに、今の自分は、「高スペックの男」に好意を持たれている。

誰でもいいわけじゃない。でも、誰がいいのかも分からない……。夜の街に溶けていく彩佳の背中では、百件を超えるメッセージに祝福されているはずなのに、今にも折れそうなほど小さく見えた。

「だからさ、真由がやればいいのよ。そういうの得意でしょ？」

飲みかけのカフェラテのカップを置くと、彩佳は投げやりな声を隠そうともせずに行った。スマホの画面には、相変わらず「読者モデル」という肩書きに群がる男たちからの通知が、不気味なほど並んでいる。

「何言ってるの、私にはもう彼氏がいるってば」

真由はスコーンを小さく割りながら、事もなげに言った。彼女は恋愛経験豊富で、前の人と別れる時の見切りも早かった。今の恋人とはまだそれほど長くは経っていない。大学院だって忙しいだろうに、彩佳とも遊ぶし、新しい恋人のことも大事にしている。真由は、真由で、エネルギーシユな毎日を送っていた。

「それに、今の彼と知り合ったのもマッチングアプリだし。実績があるんだから信じなさいよ」

「……そうだったね」

「彩佳こそ、秋田から出てきて、仕事ばかりでしょ？ 東京で生きていくなら、男と知り合うことも必要なスキルだよ。いい男と付き合うことは、『芸の肥やし』よ。現状、マッチングアプリが恋人作りの最強のツールだと思って割り切りなよ」

「あなたは音大に通う声楽家の卵なんだから。『芸の肥やし』もあるかもしれないけど、私は違うのよ」

彩佳はそう反論しながらも、真由の言葉が、シニカルでもありながら、いつも合理的で、そして意外に正しいと知っている。

だからこそ、彩佳はそれ以上、言い返せない。真由は東京の「泳ぎ方」を熟知している。一方で自分は、いつまでも足のつかない深みにいて、なんとか立ち泳ぎをしているような感覚を拭えないままだ。

「それにさ、その当馬さんって男。いいじゃない、九十点よ」

真由が身を乗り出して、彩佳のスマホを覗き込む。

「あんな『優良物件』、現実の世界で普通に生活してて捕まえようと思ったら、どれだけのライバルがいると思ってるの？ メガバンクでしょ。東証プライムよ。爽やかそうで、ルックスも悪くないし。性格だって悪くないんでしょ。そのうえ結婚願望あり。……これ以上の『優良物件』なんて、そうそう残ってないよ」

「だって、他は子供部屋おじさんに、子供が二人欲しい六十代男性。それに、いかにも遊び目当ての軽そうな男。スタートアップ起業って言ったって、個人事業主がいいとこよ」

「三十歳の夢追い人なんて、三十歳まで夢追って叶わないんだったらやめたほうがいいのよ」
「真由！もう、そういうことはいわないの」

『優良物件』、か……。

彩佳の脳裏に、当馬のあの審査するような視線がよぎる。

「君なら僕の言っていることの意味、分かってくれるよね」と微笑んだ、あの非の打ち所のない表情。

「彩佳の『いいな』と思う感覚なんて、あてにならないんだから。だって、今まで好きになった男の人、みんな訳ありだったんでしょ？　だったら、自分の直感より、データとかスペックを信じた方がいいって」

真由は悪びれる様子もなく、彩佳の過去の古傷をチクリと突いた。

「幸せになりたいなら、たまには自分のこだわりなんて捨てなきゃ」

「……そうかもしれないけど」

窓の外では、都会を行き交う人々が、誰もが幸せそうな「正解のカップル」に見えた。

真由の言うことは正しい。自分の感覚は信じられない。安定を掴むことが、この街で生きていくための「基本装備」なのだ。

しかし、彩佳の心の中の小さな自分が、耳元でしつこく囁き続けている。――それでも、誰かが引いたレールの上を走るだけの人生に、私は耐えられるの？

「じゃあ、次のデート、絶対キャンセルしちゃダメだよ。勝負服、あなたの家のクローゼットの中から男に受けそうなやつ選んであげるから！」

真由の満面の笑みに、彩佳はただ、力なく頷くことしかできなかった。

二度目のデートの帰り際、ライトアップされた並木道で彼は足を止めた。

「彩佳さん。二回目でこれと言うのは早いかもしれませんが、僕と結婚を前提にお付き合いしませんか。お互い、大人ですし、きちんとしたお付き合いをしたい」

その言葉は、まるで丁寧に清書された稟議書のように正確で、淀みがなかった。初回で言わず、二回目で言ったのは、彼なりの慎重さと、彩佳という、彼なりに「審査」した『優良物件』を十分に見極めたという自信の表れなのだろう。

彩佳は、彼のシャツのボタンをじっと見つめた。

これを「はい」の一言で受け入れれば、明日から彩佳の人生において、結婚を視野に入れたお付き合いという新たなチャプターが始まるのだろう。秋田の両親も安堵し、真由は自分のことのように手放して喜ぶだろう。

ところが、彩佳の心は驚くほど静まり返っていた。

……熱が、ないの。

公務員を辞め、翌日から行かなくてよいと実感した時の吹っ切れた思い。上京の夜、夜行バスの窓から見えた東京の灯りに胸を震わせたあの熱。翌週から好きなアパレルの店で働くことができると思った時の熱い気持ち。アパレルショップの店員として、初めて読者モデルに選ばれ、新しい自分に脱皮するような感覚に陥ったあの熱。

そして、真由と地下ライブの最前列で、爆音と汗にまみれながら『ネオンサーキット』に叫び声を上げた、あの理屈を超えた衝動。

彩佳の人生を彩ってきたのは、いつだって無鉄砲で、無計画で、不安定で、衝動的で、触れれば火傷するほどの熱い「何か」だった。目の前の当馬が提示する未来は、快適で機能的だが、どこまでも無機質で透明な何かに見えた。

「本当にごめんなさい、当馬さん。……あなたのことを、そんなふうには考えられなくて」
絞り出した声は、自分でも驚くほどはつきりとしていた。

当馬は一瞬、眉を微かに動かしした。計算外の答えに驚いたようだったが、すぐにいつもの、あの「融資係の余裕」を取り戻した。

「そうですか。……残念だな」

彼は取り乱さなかった。怒りもせず、悲しみもしない。ただ、予定していた投資案件が一つ流れたときのような、淡々とした爽やかさだった。

「また気が変わったら言うてください。僕でよかったら、いつでも待ってますから」

そのセリフがこの期に及んでは社交辞令であることも知っている。しかし彼の態度は紳士的であり、彩佳に悪い印象を抱かせない大人の対応だった。

彼は最後までスマートに、彩佳を駅の改札まで送り届けてくれた。

「じゃあ、気をつけて」と手を振る彼の姿は、街灯の下で相変わず眩しいほど清潔で、隙がなかった。

彩佳には予感があった。自分の人生において、彼という存在と交差するのは、今日が最後なのだということを。

改札を抜けて、一人ホームに立つ。手放したのは「人生の正解」だったのかもしれない。真由にはきつと「馬鹿じゃないの」と呆れられるだろう。

それでも、自動ドアが開いた瞬間に流れ込んできた地下鉄の湿った風を吸い込んだとき、彩佳は数週間ぶりに、自分の肺が深く呼吸をしたのを感じた。

「……さて、帰ろう」

誰の影でもない、誰の『優良物件』でもない。まだ何者でもない、ただの「白石彩佳」として。彼女はスマホを取り出し、いままでの当馬からのメッセージを、迷いなくゴミ箱へとドラッグした。

「……白石彩佳さん、か」

駅の改札で見送った後、当馬は表参道の喧騒を離れ、路地裏にあるバーのカウンターの椅子に腰掛けていた。

ウイスキーのグラスを握る指先が、微かに震えている。スマートに、爽やかに、傷ついていないふりをして別れる。それが彼なりの美学であり、エリート銀行員として、そして「選

ぶ側」の男として死守すべき最後の一線だった。女性の前で狼狽（うろた）える姿を見せるなんて、彼のプライドが許さなかった。

しかし、照明の暗いバーで独りになると、その仮面が音を立てて崩れていく。

「綺麗な人だったな……。単にお洒落で美人なだけじゃない、あの性格。控えめなのに、ふとした瞬間に見せる、あの強い芯があるような瞳……」

「僕は結婚まで考えていたのに……。引き摺るな」

独り言が、バーテン以外に誰もいないカウンターで虚しく響く。

これまでの人生、周りに女性がいなかったわけではない。取引先の中小企業の令嬢との見合いや、同じ銀行の同僚に後輩。大学時代にも恋人がいた。それなりに恋愛も経験してきた。

そんな彼は、AIが趣味嗜好から価値観の細部までを分析し、最適解を導き出す今のマツチングアプリの精度に、「現実以上の運命の出会い」を求めている。そして、そのシステムが引き合わせてくれたのが、彩佳だった。

「あの人と、結婚したかったな。僕なら、絶対に幸せにできたのに」

自信はあった。安定した生活、不自由のない暮らし、そして自分という相手を誇って欲しい。単なる一時の出会いではない。将来も見据えた出会いとして、この自分を、彼女も喜んで選んでくれると信じて疑わなかった。

だが、彼女が求めていたのは、彼が用意した「安定」ではなかったのだ。

「彼女、いまは結婚したくなかったのかな。惜しかったな……本当に、惜しかった」

あんなに素敵な女性と、一度はマッチングし、向かい合ってお茶を飲み、名前で呼ぶところまでいった。システムの数字上では「適合」していたはずなのに、最後の一步で、彼女の心というブラックボックスに跳ね返されてしまった。

暗い店内で、当馬は再びスマホを取り出した。A Iが「あなたにおすすめ」と提示する次なる候補者たちのリストを眺める。年齢、スペック、顔立ち、居住地。条件は完璧だ。しかし、どのプロフィール写真を見ても、先ほど消えていった彩佳の、あの読者モデルのポートレート裏に隠れていた「芯の美しさ」には及ばない気がした。

「……今日は、もう帰ろう。当分、仕事するか」

彼は会計を済ませ店を出た。春だというのに、東京の夜は、今の彼にはひどく冷たかった。

「……はあ、正気？ 彩佳、本当にもったいないことしたね」

後日、いつものライブハウスの入り口で、真由は天を仰いで大きなため息をついた。当馬とのことを報告したとき、彼女の反応は予想通りだった。

「あなた、当たりがわかってる宝くじを道端に捨ててきたようなもんだよ」と、本気で頭を抱えていた。

真由にとって、人生における恋愛は、ただの娯楽ではない。それは自分を磨き、高めるための最も効率的な「燃料」だ。いい男との出会いは、女を美しくし、視座を高くし、新しい世界を見せてくれる。だからこそ、出会いのチャンスを自ら摘み取ってしまう彩佳の不器用さが、心配でならなかったのだ。

「いい？ 彩佳。東京でいい女になる近道はね、いい男に愛されることなの。それは、付き合ってみないとわからないことなの。当馬さんみたいなランクの男に大切にされたら、彩佳のアパレルのキャリアだって、もっと自信を持って進められたかも知れないのよ」

真由は、彩佳の肩を掴んで力説する。彼女の言葉には、この街で生き残るための彼女なりの「正義」があった。けれど、ふと、彩佳のどこか晴れ晴れとした横顔を見て、真由は掴んでいた手の力を少しだけ緩めた。

……まあ、でも、これが彩佳なんだよね。

真由は思い出す。秋田から出てきて、慣れない都会で必死に背伸びしながらも、自分の「好き」という感覚だけは絶対に曲げなかった親友の姿を。誰に何を言われても、自分が

「熱」を感じられないものには、一步も近づこうとしない。その頑ななまでの身持ちの固さは、この移り変わりの激しい東京では、絶滅危惧種のような「美德」にも見えた。

「ま、仕方ないか。納得いかない相手と無理して付き合って、彩佳らしくなくなっちゃって、それはそれで私の好きな彩佳じゃなくなっちゃうしね」

真由は苦笑いして、彩佳の背中をポンと叩いた。

「当馬さんについては、本当にもつたいたいけど！……でも、あなたのその頑固なところ、嫌いじゃないよ」

開場を告げるブザーが鳴り響く。重い扉の向こうから、開演前のBGMが漏れ聞こえてきた。

「さあ、当分、恋活の話は禁止！ ライブで熱くなって、全部忘れるよ！」

真由はそう言って、彩佳の手を引いて暗闇の中へと駆け出した。親友が心配で、お節介を焼かずにはいられないけれど。それでも、彩佳が彩佳らしくいられる場所を、今は一緒に全力で楽しもう。それが、真由なりの誠実な友情の形だった。

第三章 デビュー

春から夏。長い夏が過ぎると短い秋が。そしてすぐに寒くなる。都会の忙しさと同期するかのように、季節の移ろいはめまぐるしい。『リベルテ』で働き始めて一年半が経った冬のある日。白石彩佳は二七歳になっていた。その日は、彩佳の『モデルデビュー』の日だった。読者モデルではない、観客の視線と声援を浴びてランウェイを歩く、本物のモデルとして。

昨年、彼女は既に女性誌『ブルーム』に読者モデルとして、誌面では「読モ」デビューしていた。そして今日はいよいよ、ファッションショーのモデルの一人として「ランウェイ」を歩くことになった。

そのファッションショーは、大手出版社である文鎮社が刊行する『ブルーム』と、男性ファッション誌『ヴォルティス』の二誌と、商業ビル『スクランブルプラス』の共同開催によるものだった。

『スクランブルプラス』に店舗展開しているアパレルブランドやセレクトショップが中心となり、春夏コレクションの発表に合わせて開催されている。登場モデルは、ほとんどが店員の素人女性だが、中にはインスタなどのSNSで知られていたり、読者モデルとして絶大な人気を誇る有名店員もいる。またトリとして、読者モデルではない有名モデルがショップのファッションに身を包み登場する。このイベント『ファッションシャワー二〇二六』は、開催回数としては五回目というまだ新しいイベントだが、人気ファッションイベントとして、

冬の渋谷の風物詩ともなっている。また今後は秋冬コレクションのイベントも計画されており、そうした展開のためにも今回のファッションショーはとても重要なイベントだった。

会場は毎年、商業施設の地下にあるライブスペースに特設ランウェイを設ける本格的なものだ。

地下フロアでエレベーターを降りた観客は興奮を隠せない。ランウェイを囲む最前列には業界関係者のプレスパスがきらめく。スマホを構えた一般参加者は客席だけでは収まらず、壁際の後方の立見エリアにまで詰めかけている。

控室前の狭い通路には登場予定のモデルやスタッフが忙しなく行き交う。その中に、あの工藤美玖ちゃんもいる。

彼女だったらやっぱり選ばれるよね。だって可愛いもん。

照明機材が壁際に積み上げられ、モニターにはSNSで拡散される実況映像が流れていた。ドレッサー前では最終メイク確認が続く。

出演モデル、施設関係者、ライブスペースの責任者、『スクランブルプラス』の広報担当、雑誌の編集者らしき人たち。皆がこのイベントの成功を願っていた。

「呼吸するたびに心臓が口から飛び出しそう……」

彩佳は不安に押しつぶされそうになっていた。

確かに事前にウォーキングの指導はみんなで受けたけれど……。

「ああもう帰りたい……。私なんて全然可愛くないし……。服だって似合っていないし」

彩佳から少し離れたところ小声でつぶやく素人モデル。そして彼女の肩を叩く『ブルーム』の編集者らしき女性。

「大丈夫！あなたが着てる服は全部あなたの店で売ってる服なのよ？よく似合う、いつも着ている服なのよ」

「そうかなあ。そうだよね！」

その子の笑顔が戻った瞬間、開演ベルが鳴った。

照明が落ちると同時にエレクトリックサウンドが炸裂。床振動と共にステージ上部のディスプレイに様々なブランドロゴが点滅する。待ち望んでいた熱狂の波が観客席を駆け抜けた。今宵の主役たちは薄暗いカーテン裏で最後の深呼吸をする。その視線の先には、眩しいばかりのスポットライトが彼らを待っていた。これから始まるショータイム。新人のモデルの卵たちがランウェイへ。

最初のモデルがライトに照らされながらゆっくりと姿を現した。オープニングはカジュアルなストリート系のスタイリング。シンプルなTシャツにダメージジーンズ、スニーカーという王道の組み合わせだ。しかし生地にはラメ加工が施され、動きに合わせてキラキラと輝く。

「かっこいい！」

控室のモニター越しに、客席からの感嘆の声が彩佳の耳に入る。

続いて出たのは白シャツにペンシルスカートというオフィス風スタイル。腰に巻いたグレーのガウンコートがアクセントになっている。

時計回りに次々とウォーキングが続く中、音楽は徐々にテンポアップ。ランウェイ中央には各ブランドのアイコンバッグやシューズが並べられていく。カメラマンたちはレンズ越しに指先まで追いかける。

「今回のシリーズから、新しいデザイナーらしいよね」

小声で交わされる会話には専門用語が混じる。観客の中には、ファッション誌編集者、アパレル業界の人間、マスコミ関係者、芸能関係者、様々な業界人も多いようだった。

ステージ後方から新チームが一斉に現れた瞬間、客席にざわめきが走った。

「おい！あれ『プリンセスノワール』じゃない？」

赤い絨毯のように敷き詰められたフロア。真紅のドレスを纏った五人が連携して舞い踊るように進む。スパンコールがライトを反射して妖精の羽のようにきらめく。

「やばっ、あのブランドのワンピース欲しい！十万円くらいかな？」

「うそ？二十万超えてるぞ」

背後のカップルが値踏みする声。一方で老練なスタイリストは腕を組み眉間に皺を寄せる。
「色使いは確かに華やかだが……素人であれを着こなせる人がいるのか、非常に怪しいな」
中盤に入りモード系コレクションが始まると雰囲気が一変する。黒髪を刈り上げた男性モデルが革ジャンを翻しながら颯爽と横切る。

「カッコよすぎる……あのモデル誰だっけ？」

「もしかして『リミ・フォウ』の店員さんじゃない？」

観客のスマホが一斉にフラッシュを放ち始めた。ソーシャルメディアへの即時投稿。ハッシュタグ「ファッションシャワー二〇二六」がトレンド入りする勢いだ。

続いて大き目バックルのベルト付きの黒っぽいワンピースの衣装に身を包んだモデルが登場する。

『ヴォーグ&ヴァーヴ』の工藤美玖ちゃんだ。

若い女性向けのブランドで黒、というのがブランドの今年のトレンドなのだろう。ワンピースのスカートは膝上二十センチくらいでミニといえる短さ。

「わあ！あの子超可愛い！」

「どこの子？」

「五階のショップ店員さんだって」

「あんなにスタイルいいなんて。自分が嫌になる」

「本職のモデルさんも顔負けだね」

「私もあんなに顔小さかったらよかったのに……」

ランウェイを歩く姿も様になっていた。若いのに堂々としていて、また小悪魔的な独特のオーラに客席はざわついていった。

彩佳の出番が近づいてきた。

「やだ。めっちゃドキドキしてきた……」

こんな緊張は未だかつて経験したことのないものだった。

どうしよう……ほんとに心臓が出てきちゃいそう……。

彩佳は呼吸が浅くなって、過呼吸になりそうだった。

控室の時計が十八時四十八分を指した時。スタッフのアナウンスが響く。

「『リベルテ』の白石彩佳さんスタンバイお願いします！」

鏡の前で最終チェック。今日のテーマは『都会的フェミニン』。ダブルブレストのジャケットにプリーツスカートという知性派スタイルだ。ヘッドピースはゴールドのカチューシャ。カーテンの隙間から見えた景色は想像以上に広がった。客席最後列は立ち見の人波がうねっている。

大丈夫…… 普段通りに……。

たくさんの観客なんて、カボチャだと思っちゃえばいいのよ。

自分に言い聞かせながら息を吸い込む。バックステージのモニターで自分の番号が呼ばれる。赤信号が青信号へ変わる。床を蹴る瞬間。会場の BGM が最高潮に達する。そして彩佳はランウェイへ。

足元は磨き上げられた大理石のような質感。前方から吹き付ける歓声が風のように頬を撫でる。

「まずは転ばないようにしなきゃ……それだけでいいや。転ばなければ良しとしよう！それだけ。それだけ」

一つのステップが鼓動と重なる。二歩目で背筋が伸びる。三歩目からはもう何も考えられないほど自然体だった。

「誰？あの子？かわいくない？」

「モデルさん？お店の方かな？」

「ええと、名前は『白石彩佳』さん。五階にあるショップ『リベルテ』のスタッフさんだっ
て」

「やばっ。あんなキレイな人が店員？」

「なんかすごく素敵」

「この人もプロみたいじゃん」

客席からの声が断片的に届く。もはや観客はカボチャではなかった。視線を感じるが恐怖はない。むしろもっと多くの視線を浴びたかった。

ステージ両脇のカメラマンが一斉にレンズを向ける。フラッシュが瞬き星屑のように見える。途中で振り返るターンでは裾が華麗に舞い上がった。

そして彩佳は照明のステージから漆黒の中に溶けていった。

「お疲れさまでした！」

バックヤードでスタッフたちが拍手で迎えてくれた。

「よかったよ！」

「すごく素敵でしたよ！」

「最高だった！」

頭が真っ白になっていて何を言われても返事できない。興奮していて、アドレナリンが出るってこういうことだなと彩佳は思った。

「でも、なんか……すごく気持ちよかった……」

彩佳は控室の椅子に沈み込むように腰掛けて呟いた。全身を包む達成感は言葉にできない熱さだった。

「すごかった……」

沢山の観客の視線が自分だけに集まる時間。その瞬間だけは、数百人の観客は、彩佳だけを観ていた。

その感覚は彩佳の二十七年の人生の中で感じたことのない感覚で、説明しようのないものだった。

「本当に良かったよ！」

「今夜の中で一番輝いてた！」

周りのスタッフたちが笑顔で声をかけてくれる。その温かさが胸を熱くする。足首は震えているのに不思議と疲労感がない。むしろ力が漲ってくるような高揚感だ。

私……。ちゃんと歩けたんだ……。

ライトの下で感じた自信と喜び。自分が特別な何かになれた瞬間だった。バックステージの大画面に先程の演技が再生されている。そこに映るのは他ならぬ自分自身――堂々と歩いていた白石彩佳の姿だった。

控室に戻って、多数の出演モデルたちに混じって、パウダールームでメイクを落としていたその時。

「彩佳ー！」

よく知っている声にする。とても親しみの持てるその声は親友のものだった。振り向くと真由が駆け寄ってきた。

「あなた本当に素敵だった！」

「なんであなたが？どうして？来てくれてたの？来るなら来るって言ってよ」

「内緒にしておきたかったんだ。驚かせたくて」

真由は涙ぐんでいる。

「なによ……。泣かないでよ」

「だって感動しちゃって……。あの彩佳がここまでするなんて」

「あの彩佳がって何よ」

強がりながらも嬉しさが滲み出る。ふたりで抱き合って喜びを分かち合う。

「でも本当によかった。やっぱり彩佳はこういうのが向いてるのよ」

「そんなことないと思うけど……。ありがとう」

「違うの！私は本当に思ってるよ。だって今の彩佳見てみなよ。目が違うもの」
「目？」

「うん。なんていうか……プロみたいな眼差しになった」

「プロ？」

「そう。ランウェイに立ってた彩佳は読者モデルじゃなくて本物の……。えっとごめんね。読者モデルって……モデルより低く見えているわけじゃないのよ。でも本職の売れっ子モデルさんみたいだった！」

腐しているようで褒めている遠慮のない言葉に頬が緩む。真由の言葉は彩佳の中にあつた小さな可能性を確かな形へ変えていく。モデルなんて考えたこともなかった。自分の未来に、そんな選択肢が本当にあるのだろうか。

「ねえ、今夜は飲み明かそうよ！」

真由が明るい声で言う。

「いいよ！行こう」

明日も仕事だが、今日飲みに行かないという選択肢はないだろう。

「へべれけになるまで飲んで」

「へべれけって！おやじじゃないんだから！」

「でその後カラオケ行って歌いまくって」

「飲み物もフードもじゃんじゃん頼んじゃう？」

「いいね。フードなんていつも気を使って注文するものね」

「食べ放題じゃないのに、今夜は食べ放題みたいに注文して……」

「で彩佳のアパートに行って『ネオンサーキット』のDVDと一緒に観る！」

「いいよ」

「決まりね」

人生で最高の一日になったかもしれない。

その日は結局、カラオケで盛り上がったあと、コンビニでスナック類と酒類をこれでもかと買い込んで、深夜まで真由と家で飲み明かし、早朝近くまで話し込んだあと遂には寝落ちしてしまった。

……すごい顔。

翌朝鏡を覗き込んだ彩佳は自分の姿に苦笑いする。充血した目元と腫れぼったい瞼は明らかに暴飲暴食の跡だ。顔もむくんでいる。そして微かに自分の口臭が感じられる。

ニンニク食べたっけ？ お店で匂わないかな？ 大丈夫だろうか？

「行かなきゃ」

時計を見るともう始業一時間前。慌てて冷水で顔を洗うと化粧水を染み込ませていく。ドライヤーを取り出して寝癖を直しながら改めて鏡の中の自分を見る。

ランウェイを歩いた記憶が鮮やかに蘇る。あの高揚感。自信に満ちた表情で客席を見据えた自分。照明の熱。観衆の声援。すべてが宝物のように胸に刻まれている。

真由はこれまたこちらもすごい顔で起きてきた。普段の可愛い真由を知っている彩佳にすればこれはちょっとしたホラー映画だ。

「私今日、休むわ……」

「頭もガンガンに痛いし、人と話すと吐きそう」

「彩佳と一緒に出て家帰る」

二人で急いで用意をする。

「よし」

リップを塗り終わると鞆を掴む。玄関で靴を履いているときにふと思う。もしかしたら昨日までとは違う自分になったかも。

アパートの廊下に出ると冬の朝陽が眩しかった。

「真由、行くよ」

「……おう」

彩佳が二日酔いの最低の顔でショップに出勤すると、同僚たちが既にサプライズで集まっていた、一斉に拍手してくれた。

「白石さん、かっこよかった」

「彩佳さん！おめでとうございます！」

「すごい反響ですよ！ちょっとしたネットニュースにもなってますよ！」

慌ててスマホを開くと、「ファッションシャワー二〇二六で輝いた新人モデルたち」というタイトルで、彩佳の画像も紹介されていた。

「そんな大げさな……」

謙遜する暇もなく松田店長が大きな花束を持って現れた。

「おめでとう彩佳ちゃん！」

「店長ありがとうございます。まさかこんなに盛大に祝ってもらえるなんて……」

「だって、うちの大事な看板娘よ」

『看板娘』というフレーズに胸が熱くなる。彩佳をその気にさせることで、ショップ店員としても成長させるための、殺し文句だとしても、店長が類まれなモチベーターだとしても、その言い方がとても嬉しかった。ただの店員ではいけないという自覚が少しだけ芽生える。

同時に新たな責任感も。昨日までの自分が少しずつ遠ざかっていく。

モデル事務所のオーディション、受けてみようかな？

そんな思いがふと過ぎる。

注目を浴びる喜び。評価される喜び。舞台での昂揚感。それらが人生に新しい風を吹き込んでいる。将来への選択肢が増えたことを実感する。

とはいえ今の自分が契約社員ではあるが、法定休暇を取れる働き方が貴重なものだと感じている。にしても安定していた地方公務員という職種を捨てた彩佳の事でもある。彩佳は自分の将来にポジティブになると同時に、色々と迷う自分もまた発見するのだった。

彩佳は休憩中にバックヤードのスタッフルームに置かれていた雑誌のページをめくる。そこには本職の美しいモデルが高級ブランドに身にまとい、挑戦的な視線を投げかけていた。「ああ、私もここに載れたら最高だろうな」

そう独り言を言っていると店長の声が被ってきた。

「載るんでしょ？だって彩佳ちゃんはどうそのステージに上がる権利を得たんだもの。今日から始めるんでしょ？応援するよ」

彩佳は結果的に振った形となった当馬のことを思い出していた。彼に感じなかった熱がある『ランウェイ』にはあった。

やっぱりオーデイション受けてみようかな。

第四章 発見

柔らかな春の日差しが、少しずつ強さを増していく頃だった。街路樹の葉は日に日に濃くなり、風が吹くたびに新しい緑の影が地面に揺れる。朝の空気にはまだひんやりとした清涼感が残っているが、昼下がりになると額にうっすらと汗を感じるようになっていた。

公園の芝生では、子どもたちが短くなった袖から伸びる腕を元気に振り回しながら駆け回っている。ブランコに乗る女の子の白いワンピースが、爽やかな風に揺れていた。少し離れたベンチでは、老紳士が麦わら帽子を目深にかぶりながら、値踏みをするような鋭い視線で競馬新聞をめくっている。

木陰に立つ紫陽花の蕾は、ほんのりと色づき始めていた。雨上がりの後には、その花びらが一層鮮やかに開き、淡い青や紫が目優しい。水滴をまとった葉が、太陽の光を受けてキラキラと輝いている。

コンビニの前には、早くも冷たい飲み物を求める人が増えた。アイスコーヒーの広告が、ガラス越しに涼しげな顔をこちらに向けてくる。通りを行き交う人々の足取りも、どこか軽やかになっていく気がした。

夕暮れ時、オレンジ色に染まる空を見上げると、一日の終わりが少し名残惜しく感じられる。虫の声が聞こえ始め、夜風にほのかな草いきれが混じり始めていた。それは、本格的な夏がもうすぐそこまで来ていることを、静かに教えてくれているようだった。

春の日は、初夏に向かって、こうしてゆつくりと、しかし確実に、彩佳たちの日常の中に根を下ろしていく。

ある日の仕事帰り、彩佳は駅近くのカフェの片隅で、冷めかけたコーヒーを前にスマートフォンを眺めていた。

手持ち無沙汰な指先が、本当にしばらく触れていなかったマッチングアプリのアイコンを、気まぐれにタップする。起動した画面には、下俗なポップアップ広告が三つも四つも重なって立ち上がった。

鬱陶しさに眉をひそめ、『閉じる』の小さなバツ印を狙って指を伸ばす。しかし、その直前に画面が不規則に暗転し、読み込みのズレでバナーの位置がわずかにずれた。指先が、意図しないリンクを直撃する。

強制的に開かれたブラウザの画面に、禍々しいフォントの文字列が躍った。

『最高のコレクションを公開中！』

最高のコレクション？ どうせ男の人向けの、下らないアダルトサイトか何かでしょう……。すぐに画面を消去しようとした。ところが、最悪なタイミングで視界に飛び込んできたタイトル文字列に、彩佳の指が凍りつく。

『匿名希望・販売員Aさんの放尿日記（排泄マニア向け限定配信）』

悪趣味極まりない文句だ。即座にブラウザのタブを閉じれば、それで終わるはずだった。それなのに、彩佳の胸の奥で、正体不明の黒い胸騒ぎがじわりと首をもたげる。スクロールを止めた指が、まるで何かに操られるように、画面中央の動画のサムネイル画像をタップしていた。

画面が切り替わり、モザイク処理された女性のシルエットが現れる。この画面上で、『レビューを見る』のボタンを押せば、動画が再生されるはずだ。

上手く言葉にできない嫌な予感が、胃の底を冷たく冷やしていく。ぼかしの隙間から覗く個室の壁の模様、床のタイルの素材、映り込んでいるペーパーホルダーの形状―その風景に、彩佳はあまりにも鮮明な既視感を覚えていた。

「ゴクツ」と乾いた喉が鳴る。吸い寄せられるように、画面下の『レビューを見る』というボタンを押し込んだ。

数秒のローディングの後、スマートフォンバックライトの光の中に映し出されたのは――白石彩佳、本人だった。

（ここまで約三万六千字を無料公開しています。

完全版は全十一万字超。ここから、彩佳が自分の映像を目にした後の物語、工藤美玖をはじめとする被害者たち、事件の全貌、その後の人生まで続きます。）